

## “ご縁”と“お導き” 平口 哲夫



『すなどり』200号に何か書いてくださいと編集者の北川千恵長老から頼まれ、何を書こうかとあれこれ考えた末、表題に掲げたことについて述べることにした次第です。172号(2007年6月)の楠本史郎牧師・弘子夫人記念特集に掲載された拙文「杜の都のご縁」で述べたように、私は「ご縁ですね」という言い方が好きなので、ワイズメンズクラブの西日本区2012年度次期会長・主査研修会(2013年3月9)の冊子に掲載された次期中部部長プロフィールにモットーとして「ご縁を大切に」を記しました。また、2014年4月19日(土)から一泊がけで開催された西日本区役員会の聖日早天礼拝でも「ご縁」をテーマに奨励を担当。その準備を兼ねて、私が属する金沢犀川クラブのブリテン2014年2月号から「“ご縁”と“摂理”」と題して連載を始めたものの、ブリテンの記事の穴埋めに書くので毎号というわけにはいかず、2015年1月現在、未だに完了していません。以下に記すことは、ブリテンに書き連ねたことと重複するところがあります。なお、ブリテンは金沢犀川クラブのホームページに掲載されています。

「ご縁」という日本語には仏教的な響きが感じられるので、キリスト教的にはどのような言葉がぴったりするのかと思って、172号の原稿執筆の際にインターネットで検索してみたところ、カトリック銚子教会のエンリケ・ゴメス神父が「縁」を **relation** と英訳し、神やイエス・キリストとの縁という観点から説き明かしていることを知りました。しかし、**relation**(関係)という言葉は、「ご縁」の語感にはぴったりしません。このような話をノンクリスチャンの友人に話したところ、「“摂理”がいいんじゃない？」と言われました。確かに神様との「ご縁」も摂理のうちに含まれるが、「摂理」ではいかにも硬すぎます。ワイズメンズクラブで「ご縁」を話題にすることにしてから勇文人牧師にお伺いしたところ、「“お導き”がよいのでは」とのお答え。また、改めてインターネットで検索してみたら、元・日本基督教団加古川東教会牧師の高崎裕士先生が「神様の不思議なご配慮」と似たような言葉として「不思議なご縁で」を挙げておられました。この講話では、ローマの信徒たちへの手紙8章39節「高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」が引用されています。つまり、「神様の愛」による「不思議なご配慮」・「不思議なご縁」について、高崎先生は説いておられるのです。

私たちが単に「縁」と言うのではなく、「ご縁」と言う場合は一般に「良縁」を指しています。縁には良縁もあれば悪縁もあるのですが、悪縁には「ご」を付けたりしません。人と人が良い出会いをしたときに、「ご縁ですね」とか、「これをご縁によろしく」とか挨拶をします。その出会い、またはその結果が感銘的であればあるほど、その出来事は単なる偶然ではなく、何か不思議な力が働いているように感じられ、その体験が信仰の道に入るきっかけになる場合もあります。モンゴメリー原作のアニメ映画『赤毛のアン』でマシューが「運がよかったというのとは違う。神さまが天上からごらんになっていて、あの子をお遣わしになったんだ。」とつぶやく場面があるのですが、その原文に **Providence** (摂理) という言葉が含まれているということ、北川長老に教えてもらいました。原文を読んでみて、アニメ訳は実にこなれた意識であり、私なら、せいぜい「神様の思し召し」としか訳せないと思いました。その後、村岡花子訳『新装版 赤毛のアン』(講談社、青い鳥文庫、2008)を購入して該当箇所を見たら、なんと「神さまの思し召し」と訳してあったのです。

しかし、神様の「摂理」には、人間の目からすれば悪縁と思われることも含まれるようです。私が学生生活を送った仙台の溪水寮から送られてきた『東北大学基督教青年会会報』47号(2012年5月)には、2011年度献堂式記念講演会の講演「神は全能か?—東北震災の中で考える—」が収録されていて、講師は宮城学院女子大学学長(当時)・東北大学名誉教授の海野道郎(うみの・みちお)氏です。私は、これまで「神義論」について深く考えたことはなかったのですが、「ご縁」や「摂理」の問題は「神義論」に密接な関係がありますので、この講演録を興味深く読み、金沢犀川クラブのブリテンに連綿と引用し続けてきました。海野氏は、「自然の猛威による苦難をどう解釈するか」と問いかけて、「神がすべての事象に関与しているわけではない」という考えの延長で自然法則をとらえたクシュナーをふまえ、「この世に生じる事象の中の相当の部分について、それは自然法則が働いた結果だと考えることができるなら、われわれは神の全能性について考えあぐねる必要がなくなります」と述べています。この見解は使徒信条の「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」に抵触するかもしれませんが、「父なる神」の「全能」をどのように解釈するかによって使徒信条との整合性を持たせることができるように思います。

「ご縁」は単なる因果応報・運命・宿命ではなく、自己選択可能な未来志向を持っており、「お導き」に応える自覚や自立を促すのではないのでしょうか。